

研究所だより

第306号

2011年2月28日

発行：土佐清水市教育研究所

TEL 82-3015

<関係が教育する>—石田 恒好（立教大学学園長）

1, 「慕われる」という関係

カウンセリングの著書で読んだのか、研究会で聞いたのかは定かではないが、「相談は、まず面接で信頼関係をつくることが大切である」「相談がうまくいくかどうかは、相談者と来訪者の間に、『何でも話せる』『何でも聞いてくれる』『何を話しても大丈夫』という信頼関係がつかれるかどうかにかかっている」「この信頼関係がつかれば、百パーセント成功すると言っても過言ではない」「すなわち、関係が相談する。関係が治療するのである」ということであった。

そのとき、「教育も同じで、関係が教育するといえる」と強く思ったものである。先生と児童生徒との良い教育的な関係は、親しい友達関係という横の関係ではなく、慕われるという縦の関係であるべきであろう。児童生徒から、「何でもよく知っている。何でもできる」と専門（知識、技能等）の強さを尊敬され、人柄の良さ（明るく、優しく親切、熱心、公平等）で親しまれる。この尊敬と親しみが組み合わさったときに、「慕われる」という関係ができるのである。

実際に、児童生徒との関係をよくする工夫をし、実践をして、学級や学校を、児童生徒の心の居場所に行っているすばらしい先生が、どこの学校にもいる。その先生たちは、それぞれの学校や地域で、教科部会のリーダー格でもあり、専門の強さは折り紙つきである。

2, 関係を作る①

A小学校の1年生の担任のB先生は、毎日早く登校して、教室で児童を待ち、入ってくる児童一人ひとりに笑顔で、「おはよう」「元気だね」と声をかけながら、頭をなでたり、肩をポンと軽く触ったりしている。教育講演会で「教育では、児童との良い関係が肝心。そのためには、ふれあい。ふれあいは、目をかけ（目でふれる）、手をかけ（手でふれる）、声をかけ（声でふれる）である」と聞いて納得し、早速、クラスの名簿で、一人ひとりとの関係をチェックしてみた。すべてが○とはいかなかった。そこで、児童との関係をよくするために何をすべきかを考え、前述の行動を毎朝行うことにしたのである。

成果を示す母親からの感謝の手紙がある。

— 娘は、毎朝、喜び勇んで登校します。「そんなに学校に行きたいの」「行きたい。行きたい」「そんなに学校は楽しいの」「楽しい」「どうして」「だって、先生が大好きだもん」ということです。先生に担任していただいて、ほんとに良かったと、心から感謝しています。—

この先生が、なお思い続けているのは、「児童の数だけ手がほしい」「みんなと手をつないでいたい」という。児童から好かれ、慕われるのは当然であろう。

3, 関係を作る②

C小学校の高学年担当のD先生は、低学年のように直接接触するのは問題であると、優しく目でふれ、声でふれることを心がけることとし、「一声運動」と名付

けて、すべての児童に、毎日一回は絶対に声をかけることにした。昼休みに、名簿で、声をかけた児童をチェックして、下校までに残りのすべての児童に声をかけ、放課後に名簿で最終チェックをし、声かけを完成させたのである。無口、無表情だった児童も、気楽に口をきくようになり、表情も豊かになったという。

E中学校のF先生は「話し合いの時間」を放課後に設けて、学期に1回はすべての生徒と一人ひとりで話し合うことにした。信頼関係を作るためである。最初は戸惑う生徒もいたようであるが、真剣に耳を傾け続けた結果、しだいに打ち解けて、生徒の方から相談したいことをメモしてくるようになった。クラスの雰囲気、人間関係が明るく、穏やかになっていったという。

4, 教員養成大学で私なりに

教育学部の教員であった私は、すでに述べたように、「先生は、専門の強さで尊敬され、人柄の良さで親しまれる、慕われる先生でなければならない。」と、教師論を考え、学生にも説き、そういう教員の養成を心がけた。

専門の強さについては、自らが専門に磨きをかけ、専門の領域で知られる存在となり、広く、深く、わかりやすく、楽しい授業を展開して、専門の強さが尊敬されることを体験させることにした。専門の強さの大切さに気づかせ、その強化を心がけさせた。

専門の強さは、指導でつけることができるが、人柄の良さは、指導で育成とはいきかねる。そこで、人柄の良い先生が児童生徒に示す行動を、私自身が学生に示し、先生になったときに真似て行動すればよいようにするしかないと考え、実行した。穏やかな笑顔で、挨拶、声かけの徹底である。登下校の道で、昼食の学生食堂で、校庭を歩きながらである。研究室へは自由に出入りさせ、生活、進学、就職、人生などについて談笑したり、ときにじっくり話し込んだりした。教室で、校庭で、登下校の道で、見知らぬ学生からも、気軽に、挨拶や声がかかるようになっていった。

<土佐清水市の伝説7（民話）>

【貝の川のエンコの話】

貝の川の保育園の東の山麓に、昔、那須という庄屋が住んでいた。

庄屋がある夕方、一日の仕事を終え、泥まみれになった馬を洗いに川へ行った。馬がきれいになったので手綱を引いて家に向かったが、いつもと馬の様子が違うのでよく見ると、馬の尾っぽにエンコの首が巻き付き、エンコは必死になってもがいている。庄屋は可哀相に思いエンコに巻き付いている馬の尾っぽをほぐし、逃がしてやった。

その事があった次の日の朝から、庄屋の家の軒の下の木の鍵に、毎日のように新しい魚がかかっている。（ハハア、これはこの前助けてやったエンコのお礼かな。）と思いながら、毎日その魚をいただいていた。

ところが木の鍵が古くなり、魚を掛ける時折れるとエンコも困るだろうと思って家にある鹿の角なら大丈夫と思い軒の下につるした。ところがその翌朝から全く魚が掛からなくなったと伝えられている。

また昔、貝の川浦では夏になると、体に鹿の角を輪切りにし糸を通して体につけ水泳に行ったそうで、鹿の角を体につけておけば、エンコに足を引っ張られないとの言い伝えが残っている。

